

# 特集展示「柴田家の建造物」

柴田家書院・稲荷社・諏訪神社本殿  
に息づく美をめぐって

## 解説資料

熊谷市指定有形文化財（建造物）

### しばたけしよん 「柴田家書院」概要

柴田家は『武蔵国郡村誌』や『埼玉県大里郡郷土誌』などによると、初代治右衛門忠種が武田勝頼、2代目右馬之介忠昌が織田信長と北条氏直の家臣であったと伝わり、江戸時代初頭に荒川右岸に位置する現在の上新田地区の地に定住したとされています。

柴田家の書院は江戸中期に建築され、柴田家主屋の西側に接続している建物で、書院造りの特色をよく生かした建物として評価されています。

『柴田家古文書』より建立年代は貞享2年(1685)とされていますが、棟札等は確認されていません。

檜や杉を主材とした構造で、瓦葺き屋根であり、内部の構成から書院造として分類されています。本書院の居室は10畳の上段の間であり、床・棚・建院床を設け、4畳の入側、右手に8畳の次の間、前面6尺を畳廊下の入側とし、周囲の廻り廊下も始めは濡縁であったものを現在のように改築したものと考えられています。障子や襖についても各時代ごとに改修や交換がされてきたものと思われていますが、意匠を凝らした文様を素地にするなど、精緻な印象を与えます。

室内の特徴としては彫刻の欄間や各部に「地彫り」と呼ばれる彫刻が施されています。書院に地彫りを多用した例は少なく、柴田家書院では江戸中期における社寺彫刻の技法の利用が推察されています。欄間下の柱の各所には柴田家の家紋である「下り藤に三つ引き」が刻まれた銅板が組み込まれています。各欄間には多様な主題の彫刻がはめ込まれています。梅、松、楓、牡丹と推定される植物の中に鳥が憩う様子などが描かれています。また、妻沼聖天山本殿「歓喜院聖天堂」の奥殿彫刻などに含まれる人々の動的な彫刻が複数あるなど、その関連性を期することもできます。これは柴田家が深く関わった埼玉県指定文化財「諏訪神社本殿」の彫刻建築との影響関係も想像できるところです。

なお、書院の建立時期の推定からすると、隣接する稲荷社を含めてそれらの建造物との年代に

差があることから、書院の欄間彫刻などの部分と書院自体の建立年代の推定に関しては今後の精査を要するものとも考えられます。

加えて、西側奥の控間と納戸の狭間には「藤懐永」の筆名が記された「桜と赤い陽」を主題とした絵が描かれています。風雅な印象を与える名画として書院の内部にて保管されてきました。

(指定年月日 昭和32年10月18日)

: 通常非公開



「柴田家書院」内部の彫刻

### しばたけいなりしゃ 「柴田家稲荷社」の概要

柴田家敷地内の西端に位置する「稲荷社」は正面1間、側面1間の流造で、桧皮葺の屋根に千鳥破風、軒唐破風を付け、正面に1間の向拝を設けています。中央の社殿の身舎(もや)の平面は、前面と側面に縁(えん)と高欄(こうらん)を回し、背面柱筋に脇障子(わきしょうじ)、正面向拝には浜床



(はまゆか)・浜縁(はまえん)と呼ばれる周回する部位を設けています。身舎の軸部の柱や桁や長押などの装飾は少ないですが、脇障子や臺股(かえるまた)、扉周辺にはきめ細やかな彫刻が施されています。庇(ひさし)には、地紋彫りを施した角柱と頭貫(かしらぬき)と呼ばれる柱でつなぎ、両端に獅子の木鼻彫刻を2個ずつ付けています。中央には臺股の彫物が飾られています。身舎と庇を左右で支える海老虹梁は江戸時代中期頃で見られるような、渦・若葉の波状が彫られ

ています。壁面や身舎正面の扉などに彫刻の数は少ないですが、扉の左右の壁には彫刻がはめ込まれており、稲荷社の唯一の壁面彫刻です。この壁面彫刻には川を泳ぐ魚、脇障子の彫刻には梅と鶏が彫られています。正面彫刻には「司馬温公瓶割図」があります。

この稲荷社には棟札や墨書などはなく、建立年代や大工棟梁などについて不明確な点は多いですが、彫刻の様式などを見ると、稲荷社は国宝「歓喜院聖天堂」や埼玉県指定文化財「諏訪神社本殿」を手掛けた大工たちが関わっていた可能性は高いと考えられます。また、柴田家書院に収蔵されていた建物名が書かれていない棟札には、安永3年(1774)の年代と、大工棟梁は歓喜院聖天堂や諏訪神社などを手掛けた名工・内田清八郎の名が記されていることから、稲荷社の建立に関する資料として解釈することもでき、今後においても調査研究を進める予定です。

### 埼玉県指定有形文化財（建造物）

すわじんじゃほんでん

## 「諏訪神社本殿」の概要



柴田家書院の東方に所在する「諏訪神社本殿」(上新田227)は、当地の柴田信右衛門豊忠によって延享3年(1746)に創建されたと伝えられ、その後、嘉永5年(1852)に補修されました。創建時の棟札によると、「歓喜院聖天堂」の造営に深く関わった三ヶ尻村出身の内田清八郎が大工棟梁となり、上州花輪村出身の石原吟八郎が彫刻を担当しました。また、林兵庫正清が細工の意匠に関わるほか、彩色は聖天堂と同じく狩野派の絵師が施し、高い技術力を発揮しました。同時期に建立を進めていた妻沼聖天山の歓喜院聖天堂の工事中断の間にこの本殿が手掛けられたものと推察されます。檜皮葺の屋根は信州松本城下の太田松右衛門などの技術に委ねられ、名工集団によって本殿の建立がなされたことが分かります。

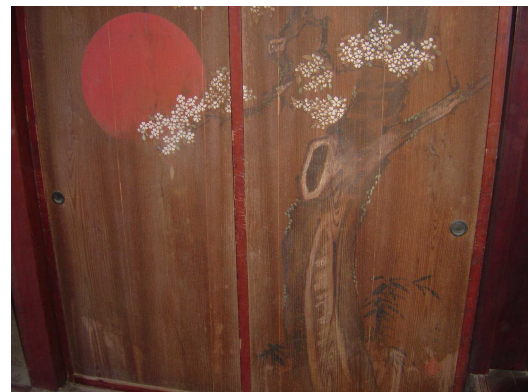
本殿の構造は、桁行1.47メートル、梁行(奥行)2.27メートルの檼造による一間社流造で、屋根の下には三角の形をした千鳥破風、軒の下に

は上部が丸く形作られる唐破風を付け、正面には屋根が張り出した向拝を設けています。現在、彩色の多くが薄れていますが、各所に施された人物や動植物の装飾彫刻から放たれる雰囲気は際立ち、実際の規模以上の風格を感じることができます。歴史を超えて保存されてきた本殿からは、洪きの中にも豊潤な芸術性が薫り立ち、江戸時代中期の熊谷地域が彫刻技術の最先端の地であったことを示す貴重な証しとなっています。

(平成28年3月15日 埼玉県文化財指定)

### 特別展示

## 杉戸絵「<sup>きょくじつおうかず</sup>旭日桜花図」<sup>ふじ かいえい</sup>藤 懐永 筆



柴田家書院の納戸奥の杉戸に描かれた彩色画である。2枚戸の右側右下に「藤懐永」の筆と、紅の落款の印が記されています。絵師の経歴等は不明ですが、柴田家の伝承等によると、柴田家書院が建立された後の江戸中期以降に内部の改修は行われていないことから、その頃に描かれたものであると推定されています。

右側の絵に満開の桜木が、左側中央上部に赤々しい旭日が描かれ、樹幹と根元にある笹の精緻な表現からは生命力を感じさせます。全体の構図や写実性の高い筆致を表しています。杉戸絵全体の特徴から、18世紀に中国古画などの写実技法を研究し独自の様式を開拓した円山応挙を祖とする「円山派」を彷彿とし、円山応挙が初春の旭日と松を描いた「旭松」などの構図とも類似しています。門下絵師には写実性の高い樹木や植物を主題とした杉戸絵及び襖絵を手掛ける事例も多いです。また、円山応挙は筆名の冒頭に本姓の「藤原」から「藤」の名を記すことがあり、後継の名代においても同様の号を記す事例があることから、筆者の円山派に対する影響関係についても、一説として推察することができます。今回、この杉戸絵は柴田家書院から外部に初めて搬出され、展示される機会となりました。

(熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹)